

翔
101101



T
O
B
U

百万石蝶談会

June 1993

金沢市医王山でアサギマダラの発生を観察

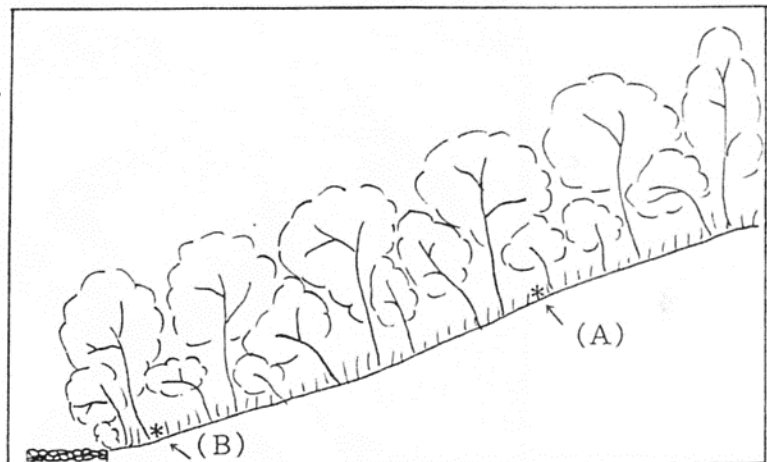
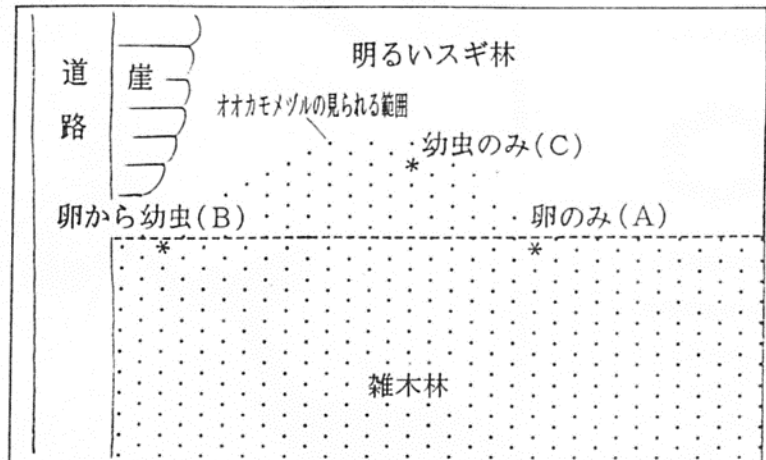
松 井 正 人

金沢市医王山の菱池でオオカモメヅルからアサギマダラの卵を発見し、2齢幼虫になるまでを確認したので報告する。県内におけるアサギマダラの幼生期の観察はまだまだ少なく、この報告が観察例を増やす資料となれば幸いである。

1992年6月20日(小雨) アサギマダラの卵、幼虫を見つけることを目的にオオカモメヅルが多く見られる雑木林を調査したところ、オオカモメヅルの葉裏より1卵ずつの2卵(A、B)を発見した。オオカモメヅルは雑木林の中に一様に広く見られ、見落とし以外は総てを調べたが、卵はいずれも林縁から確認した。この時期オオカモメヅルは長く伸びているが、上よりも横へ伝っているものばかりで、ほとんどが地上から1m以内の所で伸びていた。そんな中で卵は地上50cmと25cmの葉裏から発見した。

7月4日(晴) 1卵(A)は食草ごと行方不明になり、残り1卵(B)はフ化して2齢になっていた。また新たに、6月20日には調べなかった隣接する明るいスギ林から2齢幼虫(C)を1頭発見した。このスギは皆5mほどで、オオカモメヅルはやはり上へは伸びず地上50cm程度のあいだでスギに絡んでいた。幼虫はどちらも食痕のある葉にはいず、食痕の無い葉の裏に静止していた。

7月11日(雨) 2幼は発見できず、食痕のみが残されていた。これまでも県内で確認できた幼虫は1～2齢の若齢がほとんどで、それ以降の幼虫はわずかし確認されていない。



《まつい まさと 〒920-01 金沢市大場町東871-15》

甲 虫 三 千 種 へ の 道

徳 本 洋 ・ 高 羽 正 治

石川県の甲虫相解明の当面の目標値は3000種とすべきだろう、と筆者の一人の徳本は「翔」100号に書いた。すると早速、編集者から、そのための行動指針などについて書けとの指令がきた。蝶談会はいつの間にかチョウ・コウチュウ談会に変身していること、一昨年来、ゲンゴロウに血道をあげていた面々が、次の対象物を模索し出していること、すっかりゴミムシづいて活動家がいること、などが編集者の念頭にあるらしい。しかし、「あおだかす（扇動する、という意味の金沢言葉）」だけで、甲虫の実際のことを知らない徳本はハタと困り、高羽と相談しながら、この文を記すこととなった。

◆ な ぜ 3000 か

まず、3000という数が出てきた根拠は、前々号でも触れたとおり、近年、数県で既記録甲虫種数が3000を突破し始めたことにある。こういう県の甲虫リストの内容を、石川県のそれと比較するのが、石川県で解明の遅れているグループや、その程度をはっきりさせるのにもっとも手っとり早いと考えられる。しかし解明の進んだ県の甲虫リストをすべて入手することは急にはできないので、まず3000種突破県の一つである隣県の福井県との比較を試みよう。また、手元にあった各県のリストの中で、愛知県のものが、報告年代も新しく、解明度が石川県と似ていることから、これも参考のために併記することにした。これらは一覧表として別表に示した。

なお、この比較に用いた資料は、石川県は高羽(1992)、福井県は佐々治(1990)、愛知県は穂積俊文他(1990)である。これらの資料はそれぞれ、その県の甲虫相を総括しており、たいそう便利である。しかし、その発表後に追加されたデータも当然、それぞれの県で存在するが、この表にはそれは含めていない。

また、この一覧表は比較に統一性をもたせるため、科名やその配列は日本産昆虫総目録(1989)によって再整理したので、必ずしも、各県それぞれの著者の原著に用いられている科内容や数値と同じものではない。

◆ ど こ が 手 薄 か

この表を見ると、石川県の甲虫相解明で遅れが目立つのは、水棲のもの、キノコにつくもの、土壌性のもの、樹皮下にいるものなどである。腐肉採集などトラップを用いた採集もあまり行なわれていない。また時期的には秋期の採集が弱く、そのことはキノコにつくものの調査不十分にもつながる。

水棲のものについては、先に記したようにゲンゴロウ類の調査が急進展したので、現在、ゲンゴロウ科は27種が既記録である。だからゲンゴロウ類については進歩は見られたものの、まだ十分ではないし、ましてや他の水棲甲虫に至ってはほとんど前進がない。ガムシ科、ミズスマシ科、ヒメドロムシ科など、福井県の半数にとどまったままである。

石川県・福井県・愛知県産甲虫の科別既記録種数比較表

科 名	石川	福井	愛知	科 名	石川	福井	愛知
記録総種数	2244	3014	2259	クワガタムシ科	11	14	15
ナガヒラタムシ科	1	1	1	(クロツヤムシ科)			
チビナガヒラタムシ科				コブスジコガネ科	6	4	4
セスジムシ科	2	3	2	センチコガネ科	3	3	3
ヒゲブトオサムシ科		1	1	(アツバコガネ科)			
カララゴミムシ科	1	1		コガネムシ科	106	115	117
ハンミョウ科	12	11	9	マルトゲムシ科	1	3	2
オサムシ科	270	270	265	ナガハナミ科	8	7	5
ホソクビゴミムシ科	3	3	5	ダエンマルトゲムシ科		1	
コガシラミズムシ科	2	3	6	ヒラタドロムシ科	5	7	8
ムカシゲンゴロウ科				ヒメドロムシ科	7	14	14
コツブゲンゴロウ科	1	1	3	ドロムシ科	1	1	
ゲンゴロウ科	20	31	32	チビドロムシ科		1	2
ミズスマシ科	3	6	5	ナガドロムシ科	1	1	1
ツブミズムシ科		1		タマムシ科	40	68	53
ダルマガムシ科				ナガハナノミダマシ科		2	2
ホソガムシ科	1	1		ホソクシヒゲムシ科	1	1	1
マルドロムシ科				コメツキムシ科	120	142	146
セスジガムシ科				ヒゲブトコメツキ科	2	4	2
ガムシ科	19	28	30	コメツキダマシ科	10	33	7
(エンマムシダマシ科)				ベニボタル科	21	39	28
エンマムシモドキ科	1	1		ホタル科	10	10	7
エンマムシ科	22	42	26	ホタルモドキ科	2	2	3
ムクゲキノコムシ科		6	2	ジョウカイボン科	26	33	24
タマキノコムシ科	2	14	8	マキムシモドキ科		1	
ヒゲブトシデムシ科				ヒメトゲムシ科		1	
チビシデムシ科	5	9	3	カツオブシムシ科	10	18	16
シデムシ科	19	21	11	ホソマメムシ科			
ハネカクシ科	175	204	110	ナガシンクイムシ科	5	8	6
アリツカムシ科	5	19	29	シバンムシ科	11	26	10
ニセマキムシ科		1	1	ヒョウホンムシ科	3	5	4
コケムシ科		4	1	コクヌスト科	2	9	6
テオキノコムシ科	10	33	15	カッコームシ科	14	16	14
タマキノコムシモドキ科		1		ジョウカイモドキ科	5	16	3
マルハナノミダマシ科				ツツシンクイムシ科	1	2	1
マルハナノミ科	11	18	4	ケシキスイ科	51	85	59
クシヒゲムシ科				タマキスイ科		1	
				ネスイムシ科	3	12	1

科 名	石川	福井	愛知	科 名	石川	福井	愛知
ヒメハナムシ科	2	12	5	ヒラタナガクチキムシ科	1	1	1
ミジンムシモドキ科		1		クビナガムシ科	2	2	1
ヒメキノコムシ科		1	1	カミキリモドキ科	20	23	19
ヒラタムシ科	9	18	10	キカワムシ科	1		
ツツヒラタムシ科		1		アカハネムシ科	10	12	9
ホソヒラタムシ科	6	9	10	アリモドキ科	18	24	17
キスイムシ科	4	15	7	ニセクビボソムシ科	3	8	4
オオキスイムシ科	2	2	1	ツチハンミョウ科	7	7	5
キスイモドキ科	4	3	1	ハナノミダマシ科	4	7	3
ムクゲキスイムシ科	4	11	6	チビキカワムシ科	5	13	7
コメツキモドキ科	5	11	8	(ツヤキカワムシ科)			
オオキノコムシ科	27	48	28	ホソキカワムシ科		1	1
ミジンキスイ科		1		(タマムシモドキ科)			
カクホソカタムシ科		5		アトコブゴミムシダマシ科			
ミジンムシ科	2	10	2	ハムシダマシ科	10	11	8
テントウムシダマシ科	9	16	11	クチキムシ科	10	20	11
マルテントウダマシ科		5		ゴミムシダマシ科	54	84	77
テントウムシ科	43	81	49	カミキリムシ科	270	268	269
ミジンムシダマシ科		1	1	マメゾウムシ科	9	10	7
ヒメマキムシ科	4	10	6	ハムシ科	217	226	199
ホソカタムシ科	5	15	7	ヒゲナガゾウムシ科	23	45	22
デバヒラタムシ科	1			オトシブミ科	48	57	43
コキノコムシ科	4	13	8	ミツギリゾウムシ科	3	4	3
ツツキノコムシ科	2	14	5	ホソクチゾウムシ科	12	16	8
キノコムシダマシ科	1	5	3	ゾウムシ科	193	264	160
ナガクチキムシ科	22	54	41	オサゾウムシ科	8	9	6
ハナノミ科	23	53	12	ナガキクイムシ科	6	6	
オオハナノミ科	1	3	2	キクイムシ科	58	38	22

注1. この表には、日本産昆虫総目録に記録されている甲虫の総ての科名を載せてある。

注2. 各県の数値の出典は本文中に記してある。

注3. () に包まれた科名は佐々治(1990)が、その科の分布から考えて、福井県から記録される可能性がないとしているもの。

キノコと名がつく科は、この表の中にならかなりあるが、そのどれを見ても、石川県は福井県に比べて著しく種数が少ない。キノコにつく甲虫はキノコと名がつく科のものばかりではないから、キノコにつく甲虫を調べれば、かなりの石川県未記録種が明らかになることは間違いない。ゴミムシダマシ科、ハネカクシ科、ケシキスイ科などにも、好んでキノコに集まるものがかなりある。また生態的にも興味あることであるから、キノコの種類、時

期をはっきりさせれば面白いデータが得られるであろう。キノコの種名については、石川県には近年、石川キノコの会が生まれており、その会長はキノコ分類のベテランなので、キノコも採集して同定を依頼すれば、かなりの線にいけるであろう。なお、キノコは秋だけに出るものではないし、特に材の上に生える固いキノコは年中あり、これにつく虫は多い。

土壌性のものは、特に林内の腐葉層やその下の土壌をフルイを用いてふるえば、多くの甲虫が得られる。ハネカクシなどは、これで多数得られるし、小さなゾウムシ、アリゾカムシなども多い。その他にもさまざまな甲虫が得られよう。ただ、この手のものは、その分類が困難で、すぐに名が分かるものが少ないから、専門家に同定を依頼せねばならぬものが多くなる。ここの所はアマチュアにとっての難点かも知れないが、これをクリアすることで、虫マニアとしてのレベルは一段と高まろう。

また川岸の崩れた土石の堆積した下などを掘り起こすのも面白いのでないか。いわゆる地下浅層性の珍奇なゴミムシが得られる可能性が大きい。

トラップを用いた調査でも、単なる見付け採りでは得られない種が多く手に入る。筆者の一人の徳本は、専門のクモの調査のためにエチレングリコールを入れたピットフォール・トラップをよく使用するが、その中に入った甲虫から高羽はかなりの数の石川県初記録種を同定している。また、高羽があまり多くない種と考えていた種が、この方法で多数得られていることもしばしばあった。ピットとして用いる容器の中に入れるベートの種類を変えれば、誘引される種に変化があることは、よく知られているとおり。ただ、これまで、この方法を用いている人は石川県内にもあるが、自分のほしいグループ、たとえばオサムシだけが取り出され、他に入っている動物はすべて放棄されているというのが現状であろう。これでは、それらの貴重な生命がまったくの無駄死になるから、少なくとも甲虫はすべて取出し、しかるべき人に提供するなりして、データ化すべきである。関西ではオサムシ屋がトラップに入ったクモさえもクモ屋に提供することによって、新種のジグモの一種が各地で発見され、その分布が明らかになっている。

トラップには他にもいろいろあり、例えば馬場・平嶋編「昆虫採集学」(1991)にそれらが詳しく記されている。この本はその名のとおり、あらゆる昆虫にわたって、採集ならびにそれに関連する事項を詳しく記しているから、意欲ある人はぜひ目を通してほしい。

要するに、採集の視点を変えれば、これまでと違った種が採集できるということである。またぜひ実行してほしいのは、自分の欲しいものだけにとらわれず、ネットに入った甲虫、トラップに入った甲虫、目についた甲虫は面倒でもすべて持ちかえり、しかるべき人に提供することである。この連携プレーが実行されるか、どうかで虫相解明のスピードは大きく変わるであろう。

◆ いつ3000種に達するか

石川県が昆虫リストを最初に発行したのは1978年で、そのときの記録甲虫は1504種で

あった。そして高羽が1992年に石川県産甲虫既記録種をリストしたときには2244種になっている。(徳本が前々号で2242種としたのは間違いで2244種に訂正する。) 従って14年間に740種が増加しているから、年平均 58種の増加となる。もし、この率で増えるとなると高羽の2244種を3000種にするには、その差 756種をこなすのに13年を要する。しかもこれからの増加対象となる種は、従来どおりの採集法では目に触れにくい種、希少種、小さな種、同定困難な種が多いと思われるから、採集方法や同定方法を従来どおりにしていたのでは、過去の増加率を維持することさえ困難であろう。ちなみに福井県では先の福井県昆虫総目録発行の1985年の2644種から、1990年の3014種に達する間の年平均増加数は74種である。

また、ある地域の生物を一定方法で継続して採集していくと、その累積種数の増加率は、はじめは急であるが、その後、次第にゆるくなり、ついにはまったく増加しなくなる。この種数増加曲線が水平に近付いているか、どうかで、その地域の生物種数調査が終局に近付いているか、どうか分かることはよく知られていることである。だから、調査が終わりに近付くほど種数増加率は鈍る。そういう意味でも、今後の記録種数増加は難しくなっていくであろう。

しかし、今はまだ、そこに至るはるかに前の段階である。高羽は、大串龍一教授が進めておられ、徳本も一部かかわっている金沢城内、特に本丸跡の動物相調査で得られた甲虫の同定を行なっているが、あの街中の狭い土地からでさえ、すでに13科22種の石川県初を見いだしている。ゲンゴロウ科でさえ、灯火に初が飛来している。広い県内のフィールドには石川県初がわんさと諸子の発見を待っているのだ。

とはいっても、石川県の解明甲虫相を3000種にするには福井県なみの増加率にピッチを上げて、10年はかかる。諸子はこれを容認するのか。チョウ・コウチュウ談会の若手諸子の奮起を切に望む。

《 参 考 文 献 》

- 馬場金太郎・平嶋義宏(編), 1991. 昆虫採集学. pp. 666. 九州大学出版会. 福岡.
 穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上). pp. 506. 愛知県昆虫分布研究会. 名古屋.
 福井県, 1985. 福井県昆虫総目録. pp. 404. 福井.
 石川県, 1978. 石川県の自然環境. 第4分冊. 1-145.
 佐々治寛之, 1990. 「目録」発行後に福井県から記録された甲虫類の目録.
 福井虫報, (6): 39-51.
 高羽正治, 1992. 石川県産甲虫類初出文献一覧表. pp. 89. 石川むしの会. 金沢.
 徳本 洋, 1993. 石川県昆虫総目録作成の声をめぐって. 翔, (100): 11-17.

《とくもと ひろし 〒921 金沢市泉野出町1-2-6》

《たかば しょうじ 〒920 金沢市若松町2-163》

加賀・江沼のオオムラサキ

富 沢 章

石川県にオオムラサキは広く分布すると思われるが、加賀・江沼方面の記録が知られていないようである(松井、私信)。ここでは大変古い記録で取り上げる価値はないようであるが、以下の記録を報告する。

1961年8月 5日 山中町山中温泉 1♂ 富沢 章 採集

1966年7月10日 山中町我谷 1♂ 富沢 章 採集

また、矢田新平氏の古い報告(1963)では、山中町市ノ谷、山中町今立、加賀市山代が産地としてあげられている。

《参考文献》矢田新平, 1963, 小松加賀江沼の蝶, 小松市科学研究所報(35)別刷, pp20.

《とみざわ あきら 〒923 小松市大川町3-71》

石川県初記録の甲虫5種

野 中 勝

甲虫の標本を整理していて気がついた、高羽正治氏の石川県産甲虫類初出文献一覧表に載っていない甲虫5種の採集記録を報告したい。このうちタマキノコムシ科の3種はいずれもブナ枯木に生えたキノコより得られたもので、得られた3種とも石川県未記録ということで、キノコに集まる甲虫類の調査がこれまでほとんど行われていなかった事を物語っていると思われる。

ことしは中西重雄氏がキノコに集まる虫の調査に乗り出すということなので、未記録種が数十種報告されるのではないかと楽しみである。また、上田 昇氏によるゴミムシ類の調査も、とても人間業とは思えぬスピードで進行しているとの事であり、5年後(?)の昆虫総目録に向けて、少なくとも甲虫に関しては明るい材料が多いと言えるだろう。

最後に、同定に関して助言をいただいた井村正行氏と、白山国有林の釈迦林道への立ち入りに関して便宜を図っていただいた金沢営林署の方々に、謝意を表したい。

タマキノコムシ科

ウスイロヒメタマキノコムシ Pseudocolenis hilleri Reitter

1992年10月10日 白峰村白山釈迦林道 3頭 野中 勝 採集

ワモンマルタマキノコムシ Agathidium annulatum Hisamatsu

1992年10月10日 白峰村白山釈迦林道 3頭 野中 勝 採集

オオマルタマキノコムシ Agathidium subcostatum Portevin

1992年10月19日 白峰村白山釈迦林道 2頭 野中 勝 採集

ゴミムシダマシ科

クロルリゴミムシダマシ *Metaclisa atrocyanea* (Lewis)

1991年10月20日 白峰村白山釈迦林道 1頭 野中 勝 採集

ナガクチキムシ科

カツオガタナガクチキ *Synstrophus macroplthalmus* (Reitter)

1986年 2月11日 小松市五国寺 1頭 野中 勝 採集

《のなか まさる 〒458 名古屋市緑区鳴海町伝治山1-2 タウン伝治山9-206》

エゾカタビロオサムシ越冬個体の採集記録

上 田 昇

朝から晴天である。車庫より少しサビたピックルを取り出し、以前から目を付けていた近くの観法寺に行き、崖を崩し始める。最初のひと振りでミイデラゴミムシ、次にアオゴミムシ、これは集団越冬していて臭い。アトワアオゴミムシも採集する。本人は楽しんでいるのだが、他人が見るとまともな人間には見えないだろう。顔や体にドロが付き、前日の雨で上から下まですさまじいスタイルとなり、我が奥様でも避けて通る状態になっている。でも、これをしないと好きな虫が取れないし、ここはやはりと使命感に燃え、もう一尺と掘り続けるうちに、ついに出ましたエゾカタビロオサムシ。この瞬間、多くの方が体験している通りに、自分の手が少し震えながらもしっかり毒ビンへと虫を運んでいる。しめしめと思いつつ、次のポイントに移る。スナハラゴミムシが出てくる。その次にまたエゾカタビロオサムシが出てきた。オスであった。以前にも崖から掘りだした事があるので、一緒に発表しよう。

1991年2月25日 金沢市四坊 1♂ 上田 昇

1993年2月 6日 金沢市観法寺 2♂ 上田 昇

越冬個体の採集は楽そうに見えるが、道のない所を崖を崩しながら歩かなければならず、これは相当に疲れる。それと常に回りを注意しないと、下に人がいて石が当れば大変な事になる。側溝があれば、これも注意しないと埋めてしまう。常々人の迷惑にならないよう心がけていなければならない。自分なりに環境を壊さないように気をつけている。

また、虫の好む環境を見分けることも大切で、その目をこやすためにもどんどんフィールドに出かけなければ虫は採れないし、さらに既存概念を捨てさることも忘れてはならない。とにかく自分なりにひとつひとつ確かめる事の方が大切に思う。

最後になりましたが、越冬個体の採集記録がないと発表を進めて下さった野中 勝氏に感謝します。

《うえだ のぼる 〒920-01 金沢市百坂町イ27-9》

わいいかも。最近では代理母を使った希少種の累代を手掛けたり、パンダマウスを飼ったりしている。

島根半島でアサマダ越冬

アサマダ情報一五二によると、九十一、九十二、九十三年と島根半島でのアサギマダラの越冬が確認されている。確認者の衣笠弘直氏は、まずキジョランの分布調査から始め、次いで継続調査の可能な島根半島付近をフィールドに選定したらしい。

キジョランの分布がアサマダ越冬のキーのようで、石川県付近でもキジョラン分布を調べたが、文献では県内には分布せず、現地調査でも、加賀市鹿島の森や東尋坊雄島には見当らなかった。

中国へ遊交調査団を派遣

四月七日第一次日中遊交調査団は北京へ出発。二十七日まで昼寝をしながらのんびり遊び、各地で情報収集。隊長は昨年同様井沢國雄氏で、大

きな成果が期待される。

この成果をもとに、第二次調査団は四月二十九日に北京入りの予定。二次隊は一次隊と違つて短期決戦型で、圧縮スケジュールはおなじみ中西重雄氏がチーフを務める。

象潟でゲンゴロウをすくう

ゴールデンウィークは家族サービスを兼ねた虫採りが一番とばかりに、井村デリカは秋田県に向かった。パパの狙いは大型のゲンゴロウだったが、家族連れの為もあつてか、ツブケシ以上、コガタノ未満の結果に終わる。

青く染まった赤谷

連休後半、「春まで待てない」効果で白峰村の赤谷・小赤谷は、県外ナンバーが狭い谷を埋め、あつちもこつちもブルーに染まった。ブルーネットに始まりウエア、パンツもブルー、極め付けはブルーの車で、これではギフもどつちへ行こうか迷ってしまうだろう。

反対に嵯峨井・井澤の県内勢はブルーが恐くて近付くこともできず、同時期発生 of 五箇山へ二度三度と逃避行。辛うじて全国区の金平氏には免疫があつたらしく、ブルーに溶け込んでいた。

長大洞窟では何が採れるか

おなじみ中西・井村の先物取扱組は最近洞窟づいてる。狙いはメクラチビで、百米ものコードリールを用いた照明装置を使つたり、岩盤を穿つてトラップを設置したりと大がかりな事をしてる。

ところが脇道ありありの長大トンネルは、うかつに進むと迷つてしまふらしく、道教えこと松井氏の参入を期待している。雨には左右されず梅雨時が一番とか、昼夜に関係なくいつでもできるとか、夏はたいへん涼しいとか、バツトガノが取り放題だとか、あの手この手で誘つてゐるが、シラホネとかミモトフメイとかが見付かりはしないかと、松井氏は不安がつてゐる。

例会の記録

四月二日(金)城南管工二階にて八時より開催。

今回は、採りたてのゴミムシと図鑑持参の上田氏に終始翻弄される結果となつた。毒瓶からは、県内初記録のゴミムシがゾロゾロ出てきて話題を独占し、最後は、吸虫管の話で締めくくられた。

小さくてすばしっこいゴミムシを捕まえるには吸虫管が一番とかで、これが無いと指をなめる事になる。唾液でムシを指に貼り付け、殺虫管に入れるのだが、すばしっこいから一度では捕まらない、そこで何度も指をなめる事となり、必然的に口の中がジャリジャリになる。これを解消する吸虫管は必需品だが、これにも色々問題があつて・・・ここからは改良吸虫管の話になり、益々おもしろかつた。

参加は、井澤、近藤、山岸、徳本、上田、下田、指田、中西、松井、井村、竹谷、細沼、の十二名。

会員の動き・しゃべの動き

ギフもびつくり、春の降雪
兼六園のサクラもそろそろ満開かというのに、金沢は雪平地ではそろそろギフチョウも最盛期だというのに、一面の銀世界。思わぬ寒さに春の虫達も震えているだろうが、まさか死に至ることはないだろう。虫はそんなにヤワじやない。

松井氏、花粉症には泣く

松井氏、花粉症をおしてギフの調査。三月、四月はマスクを離せないとかで、ワイヤーブラならぬワイヤーマスクを愛用している。ワイヤーが顔面にフィットしてメガネが曇らない優れたのだが、天気が良いと白いマスクはたいそうまぶしいらしい。

ブルーのマスクでもあればギフも寄ってきて一石二鳥かも知れないが、変なおじさんになって、満足に網も振れない事態になるかも知れない。

野中氏、早くも活動開始

引越越し早々野中氏、井村会長より入手した近隣カミキリ屋リストを基に、地元虫屋とコンタクトを図る。その甲斐あってか念願のヒラヤマコブハナをガッポリ採らしてもらった。

転虫は禁か？

第二虫屋は花盛り入社して一、二年で転職する第二新卒が今や奇異に感じられず、かつての「転職は禁」の教えが時代遅れに感じられる。

蝶談会においても、今や第二虫屋が花盛りで、蝶から次々と転虫し、今や元蝶屋の割合が大きくなってきた。
「転職は禁」の教えを守り、最初に手を付けた虫にこだわって続けるのは、古い時代の虫屋だろうか。

大型ゲンゴロウが大好き！

新入会員の立脇氏、大型のゲンゴロウが大好きらしく、大阪に一番近い生息地を探している。やっぱり近い方が足も運び易く調査もやり易い。ありがたい事に、年々西の方から近づいてくるらしい。

ヒロコさんマウスに転ぶ

最近とんと音沙汰の無かったヒロコさん、ムシからマウスに転んだらしく、白いの黒いのたくさん飼っている。マウスは年4化とムシと変わらないが、累代はムシより簡単とか。毛皮はムシより触りがいいがあり、主人を識別し呼ぶと反応するとなれば、飼育屋にとってはマウスの方がか

翔

NO. 102

1993年6月10日発行

百万石蝶談会

金沢市大場町東871-15 松井方

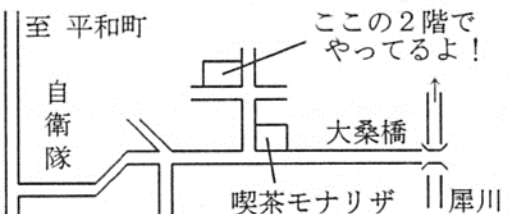
〒920-01 ☎0762-58-2727

郵便振替 金沢5-562

印刷 小西紙店印刷所

例会は偶数月の第1金曜日8時から

TEL参加もOKです(0762-44-3318)



目 次

松 井 正 人：金沢市医王山でアサギマダラの発生を観察	1
徳本 洋・高羽正治：甲虫三千種への道	2
富 沢 章：加賀・江沼のオオムラサキ	7
野 中 勝：石川県初記録の甲虫5種	7
上 田 昇：エゾカタビロオサムシ越冬個体の採集記録	8
編 集 部：会員の動き・しゃばの動き	10